

値一覧を使った属性の選択

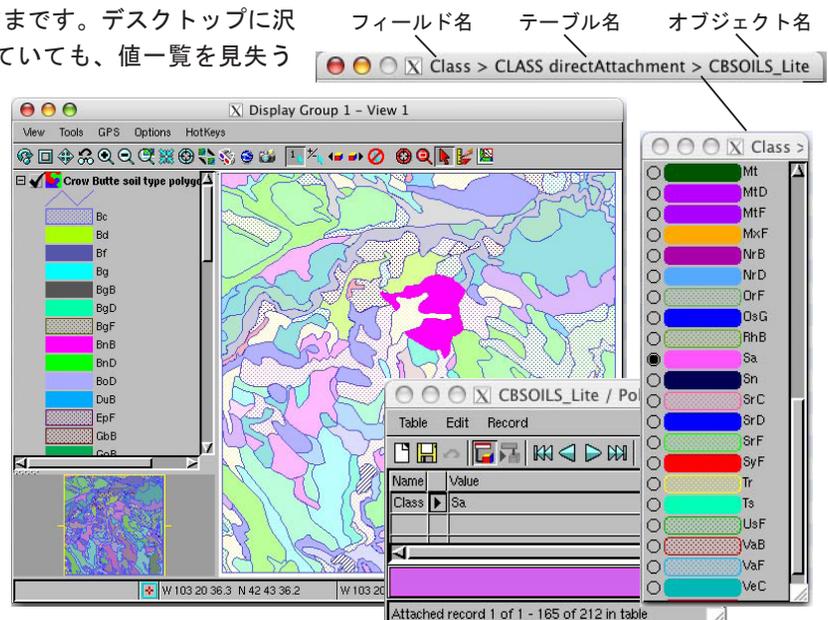
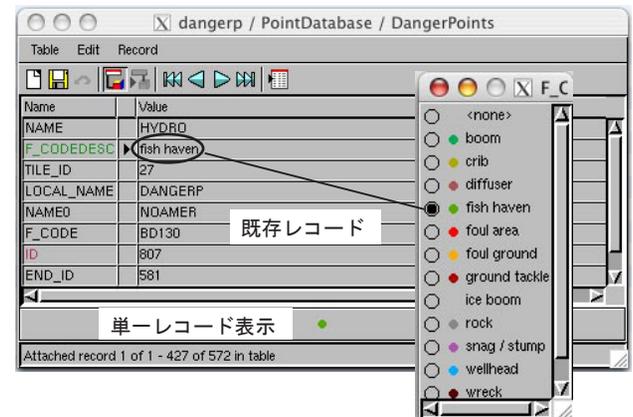
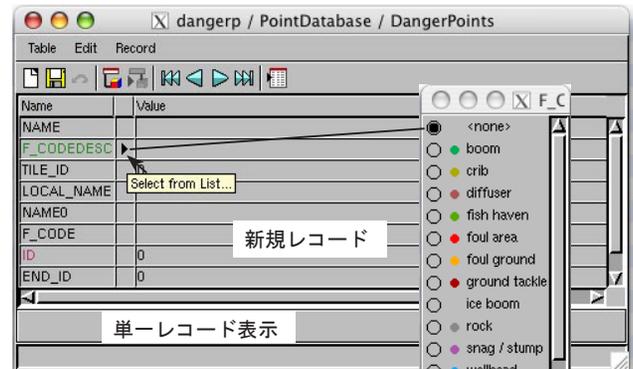
値一覧を使うと、扱っている図形オブジェクトに対してあらかじめ用意した定義済み属性値の一群から、属性を図形要素に簡単に割り当てることができます。複数の値一覧を開いたり使って、属性を新しい要素や属性の付いていない既存の要素に割り当てたり、割り当て済みの属性を変更することができます。値一覧は、他のテーブルに外部キーで関連付けられたデータベーステーブルの文字処理フィールドに対して、自動的に使うことができます。また、外部キーが指し示す主キーフィールドにスタイルが割り当てられていると、値一覧の属性値の隣にスタイルのサンプルが現れます（右図参照）。値一覧を最大限に使用するために、リレーショナルデータベース構造を適切に作る必要があります。適切なDB構造については、テクニカルガイドの“データベース：属性の値一覧の設定（Database:Setting Up an Attribute Pick List）”で議論しています。

値一覧は単一レコード表示ウィンドウから開きます。テーブルの中で1つ以上のフィールドが外部キーであれば、すでに値一覧があり属性を割り当てられます。値一覧が利用可能かどうかは、各外部キーのフィールド名の前の、右向きの矢印によって示されます。矢印をクリックすると、そのフィールドに対して可能な全ての属性値を持った値一覧ウィンドウが開きます。値はアルファベット順に並び、スタイルが割り当てられていればスタイルも表示されます。TNT製品では複数の単一レコード表示を開くことができますが、次のページで示すように、それぞれを使って複数の値一覧を開くことができます。

TNTは最後に単一レコード表示を開いたときに、開いていた値一覧を覚えています。その単一レコード表示を再度開くと、たとえTNTを再起動したとしても、同じ値一覧が自動的に開きます。テーブルが2つ以上の外部キーを持っていて、単一レコード表示から複数の値一覧が過去に開かれた場合、それら全ての値一覧が自動的に開きます。

値一覧は新しい属性値の割り当てや、すでに割り当てられている属性値を変更するために使われます。値一覧から値を選ぶと、関連する単一レコード表示の対応する値が即座にアップデートされます。値一覧は、フィールド値を割り当てた後もウィンドウの[閉じる (Close)]アイコンで閉じるか、関連する単一レコード表示を閉じるまで開いたままです。デスクトップに沢山のデータベースや他のウィンドウを開いていても、値一覧を見失うようなことはありません。

この図には、選択したポリゴン、土壌の種類 (soil class) を示す単一レコード表示および土壌の種類の値一覧が示されています。値一覧はデフォルトではスタイルがあればスタイルと一緒に、また最も長い属性値の幅に合わせて開きます。値一覧で項目を表示するにはこの幅で十分ですが、値一覧のフィールドのフルネームを表示するには幅が足りないかもしれません。全体の名称の中でフィールド名が他の値一覧と区別する上で大切なので、最初にフィールド名が示されています（右上のタイトルバーを広げた図を見てください）。

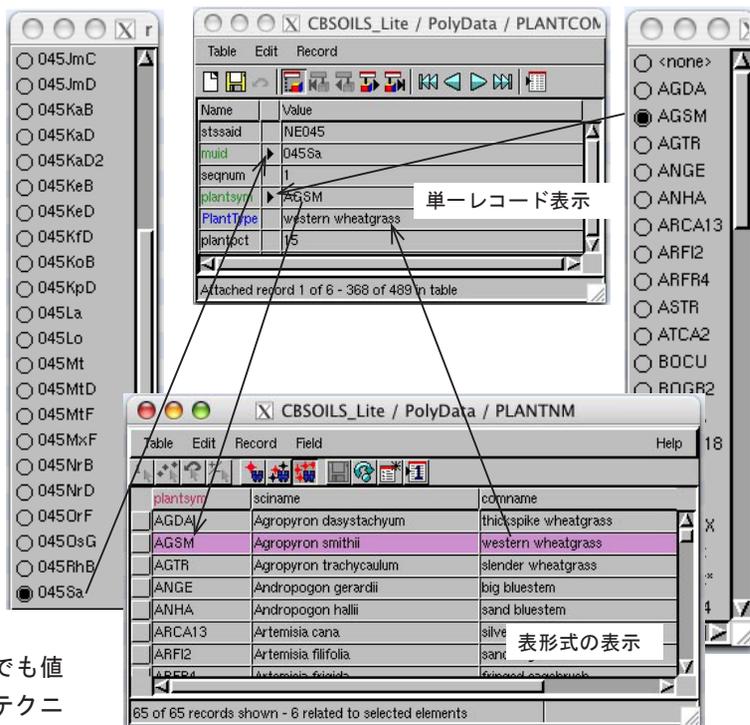


値一覧はいつも、それが参照するテーブルの前面に来ます。TNT は、値一覧を参照するテーブルを最後に開いたときに値一覧が開いていたかどうかを覚えています。値一覧が前に開いていれば、次に関連するテーブルを開いた時に値一覧も開きます。テーブル中に値一覧の値を挿入するフィールドが複数ある場合は、値一覧の選択肢に合うように他のフィールドもアップデートする必要があります。また、値一覧の選択やその他の情報を基にして、数値処理 (Computed) や文字処理 (String Expression) フィールドを使って、他のテーブルから適切な属性値を持ってくることができます (右図参照)。

値一覧は「リレートのみ」のテーブルで作成できるので、空間エディタで保存するテンプレートオブジェクトの一部としても保存され、このテンプレートを使って作成する新規オブジェクトでも値一覧をそのまま使うことができます。詳しくは、テクニカルガイドの“空間エディタ：地理データテンプレートの作成と使用 (Spatial Editor: Creating and Using Geodata Templates)”をご覧ください。

データベースフィールドの制約を使うと、TNT 製品の旧バージョンでも値一覧とよく似た機能を利用することができますが、セットアップに際してかなり入力が必要です。旧バージョンや TNT2009 でもこの方法は使えます。外部キーフィールドにはそれが指し示す主キーフィールドの値だけを許し、ポップアップウィンドウかオプションメニューでこれらの値を表示するように指定します。データベースの制約を使って作った属性選択リストは、データベーステーブルの単一レコード表示やテーブル表示からアクセスできます。このような関係や動作は、〈テーブルプロパティ〉ウィンドウの [制約 (Constraints)] タブで各フィールドごとに設定します。一方、TNT の 2009 バージョンでは、外部キーと主キーの関係があれば、単一レコード表示にすると値一覧が自動的に利用可能です。

シェイプファイル形式はもともと関連するデータベーステーブルを 1 個しか持つことができません。したがって、シェイプファイルでは、自動的に利用可能な値一覧の条件 (他のテーブルと外部キーの関係がある文字処理フィールドの属性) は成立しないと思われるかもしれません。しかし、TNT 製品でシェイプファイルを直接使用すれば、シェイプファイルにそのようなテーブルを加えることが可能です。値一覧を提供するテーブルは、TNT 製品の中でのみ可視可能ですが、シェイプファイルの直接利用やインポートをサポートしているソフトウェアでも見ることができます (アタッチの形式が暗示的 1 対 1 の .dbf テーブルで、シェイプファイルと一緒に使うことのできるテーブルであれば)。詳しくはテクニカルガイドの“シェイプファイルに値一覧を作る (Database : Create a Pick List for a Shapefile)”をご覧ください。



上のテーブルには、2 つの値一覧 (緑色のフィールド名) と、文字処理フィールド (青色のフィールド名) があります。文字処理フィールドは値一覧の選択に基づきある値を返します。この例では数値処理と文字処理フィールドを使って、値一覧で選んだ内容に従ってさらにフィールドに値が自動的に入ります。

上のテーブルと値一覧は、前ページの下にある図で選択したポリゴンに対するものです。値一覧テーブルにはスタイルは割り当てられていません。

